コラム「きのうきょう」

活きるために食べる

文&写真　学生記者　田中未来（文学部3年）

「死ぬ前に食べたいものはなんですか?」という質問を日常会話やテレビ番組でも頻繁に耳にする。この手の質問は答えを一つに絞るのがなかなか難儀であり、かつ丼、いや、空揚げ…と小一時間思案を巡らせること、やぶさかではない。

本題はかつ丼か空揚げかの議論ではなく、このような質問が頻出するくらい「食」は人々にとって大きい存在だということである。言うまでもなく「食べる」ことは生命存続の最たる手段だ。しかし楽に食料を確保できるようになってからは、「食」は手段から娯楽に近いものに変わりつつある。おいしいものを食べることに無上の喜びを感じる人は少なくないだろう。

私もおいしいものを食べることがとても好きだ。神社にお参りするときには必ず「おいしいものをおいしく食べられますように」と拝むくらいに。しかし人間誰しも体調は崩すもので、私もそれは例外でなく去年は冬の間中胃痛に悩まされ、1カ月ほど「おいしいものをおいしく食べられなく」なってしまった。あれはこたえた。

初めて自分のあきれた「食欲」が尊く感じられたくらいだ。普段食べるという行為がごく当たり前で、それをありがたいことだと常に感じるのは難しい。しかし、満足に物を食べられなくなって初めて笑顔でご飯を食べることができている自分が、屈託ない幸せ者だったのだと実感できた。

胃痛から解放され、1カ月ぶりにちゃんとしたご飯を食べた日のことだ。ふとあることに気が付いた。かつ丼を至福の顔で頬張っていると、向かいに座っていた母が「おいしい?」とうれしそうな、でも少しだけ心配そうな表情で尋ねてきた。

「おいしい、すごく!」と勢いよく答えた私だったが、なんとなく心の奥が温かいような切ないような不思議な気持ちに包まれた。なんだろうと考えていたのだが、母の安心した表情を見てやっと分かった。

母は私とご飯を食べるとき、必ず私に「おいしい?」と聞くのだ。これは母にとっては「おはよう」や「いってらっしゃい」のように当たり前の言葉で、一度も欠かしたことはない。私は母にそう聞かれるその瞬間がたまらなく好きで、他のどんな言葉より母の愛情を実感できた。

久しぶりの「おいしい?」に、私は泣きたくなってしまった。母に「おいしい?」と聞いてもらえる日々は永遠ではない。母と一緒に食事をしているこの空間は、唯一無二のかけがえのないものなのだ。幸せだと心の底から思った。幸せなのに、心の底から泣きたかった。

おいしいものを食べることは幸せで、大切な人とおいしいものを食べることもまたこの上ない幸せなのだ。

長々と語ったが、二行ですむ簡単な話なのだ。さて、きょうの晩ご飯はなんだろう。